

# 公益の風 #31



東北公益文科大学教授

呉 尚浩

全国初の「公益学」立ち上げを掲げる東北公益文科大学の開学に共鳴し、2001年に庄内の地に赴任した。以来、地域の方々、学生や職員と共に、公益をデザインし実現するべく、実践・教育・研究を積み重ねてきた。特に、自然の循環的な利用と保全のために結集した力を、より多様な地域づくりのエネルギーに転換させて、飛島の島づくり、海ごみ問題、海岸林保全などをテーマに「自分たちの自然・地域は自分たちで守り・創る」という内発的地域づくりを目ざしている。

## 地域における「公益社会のデザインと実践」を全国に発信する

自分達以外の「他者」への配慮が欠けた行動から生まれる。言いかえれば、他者（人々、自然環境）とのつながりを失った状態、他者の存在を無視・軽視した状態から生み出される。したがって、公益とは「他者の存在を尊重し、他者への思いやり」と、他者とのつながり・調和を大切にすることを心にもとづく思考と行動」であり、まさに「公益は愛なり」といえる。私は大学教育の中で、公益を求める「心」のあり方、実現する具体的な「方法」論と「行動」力の三つを、バランスよく、実践的に学ぶことを心がけている。

改革や国際社会の協調が必要である。目の前の一つのごみを拾うことから、国・国際レベルの経済社会の問題へと学生の眼差しを広げていく。公益実現のプロセスの中でも、私が重要視するのは、多様な主体が「共に考え・ビジョンをつくり・実践する場」の創出である。飛島では「とびしま未来協議会」、海ごみでは「山形県海岸漂着物対策推進協議会」「美しいやまがたの海プラットフォーム」、海岸林では「出羽庄内公益の森づくりを考える会」といった関係者の協議会やネットワーク、大学内では「地域共創センター」の立ち上げや運営、計画づくりとその推進体制づくりに関わってきた。

この25年ほどの間に、各分野で庄内での取り組みは一定の成果を挙げ全国モデルとなった。今後、海ごみ問題では処理推進から発生抑制へ、海岸林では針広混交林や広葉樹林へ適正に誘導する管理など、より根本的な解決に向けたアクションを取る必要がある。この試みが成功すれば、庄内は他地域のモデルとなり続けることができるだろう。まさに、地域の人々の意識の根底を変える岐路に立たされており、新たな公益の風が吹いていることに期待したい。



写真は、日本海岸林学会・酒田大会における現地検討会（万里の松原）の集合写真（学会・公益の森づくりを考える会のメンバー、公益大・山形大の学生たちと、2023年10月28日）